

大学と附属が連携して
授業アーカイブを蓄積

長崎県で採用される小学校教員のうち、長崎大学教育学部卒の割合は約六割。これは全国の国立大学の中では上位に入る好成绩なのだそう。つまり長崎で先生になりたいと志す受験生は、長大に行くのが一番の近道ということ。山路裕昭学部長にお話を聞きました。

「うちの教育学部の場合、附属の四校（附属幼稚園、附属小学校、附属中学校、附属特別支援学校）があり、かなり密度の高い教育実習ができるのが強みです。しかも昨年度からは、この附属での実習をビデオ撮影して、それをネット上で蓄積する『授業アーカイブシステム』を導入しました。学生自身も自分の授業を客観的に観られるし、私たち大学の教員や学校の先生方も情報共有できます。どんどん蓄積していきますので、去年の授業と今年の授業を比べることも可能になります。それと同時に、教職を退職したベテランの先生方をアドバイザーとして採用し、実習現場のトラブルや学生の精神的なケアに活躍してもらっています」。

実習現場のトラブルといいますが？

「学生が授業をうまくできなくて悩んだり、急にやる気がなくなったり。我々も目が届かない問題を小さなうちに早めに見つけて、適切な対応をとってもらいます。実際に現場に出ると、それぞれ異なる個性を持った子どもたちを相手にしますので、習ったことと違うととまどう学生も多いのです」。

確かに、最初につまづくと、知識と現実のギャップは大きくなってしまいうものかもしれないですね。



行っています。これは学校に喜ばれますね。そのほか、ボランティア実習、地元企業での実習、野外体験実習など、四年間のなかには多彩な体験学習メニューが用意されています。特にインパクトが大きいのが、五島など

驚くほど豊富な実習のバリエーション

「附属だけではなくありません。長崎市内の小学校にどんどん入っていく、運動会などのイベントの手伝いをしたり、授業に遅れがちな子を個別に教えるなどの学習支援も行っています。

の離島に一週間ほど行き、泊り込んで島の人々とも交流しながら教育を学ぶ離島実習でしょうか。子どもの数が少ないため複式学級（二つ以上の学年を一つにした学級）の場合もあります。今年からは南島原や松浦など実習場所をふやして展開しています」。

新しい教職大学院計画 実力あるプロを養成

「近年の学校ではベテランの先生方が大量退職し、教師の数が足りなくなっています。これまでのように若い先生を一から育てて育てる余裕はあまりありません。求められているのは、より質の高い実践力のある教員、タフな教員なのです。そこでもう一つ、現在準備を



新たな取り組み

タフで実践的な 教員を養成するための

山路裕昭

教育学部長

やまじひろあき
長崎大学大学院教育学部教授 一九八〇年
広島大学大学院教育学部研究科教育科学博士
課程単位取得満期退学 二〇一〇年より現職
専門分野は教科教育学。田ノ浦の科学教育に関する研究がテーマ。

現職の教員を受け入れて再教育する目的もあります」。

一度現場で教えた先生が、学びなおすこともあるんですか？

「はい、そのニーズがあります。先生になったものの、自分に足りない部分が見えてくると、そこを学びなおしたいというケースですね。これからの大学は、ますます地域教育の中心としての重要性が増しています。養成、研修など、いくつもの場面で大学と県や市の教育委員会、そして学校がつながりながら機能していく時代ということでしょう」。

海外の事例を見てみると、時間をかけて専門職としての教員をしっかりと作るというのには世界的な流れのようです。将来的には学校の先生の多くが大学院の修士生という時代が来るかもしれません。

附属4校はここ数年ですべて改修工事を行い、キレイで使いやすくなりました。各施設のサインなども可愛いデザインに。



蓄積型体験学習

島へ！へき地へ！ 地域の輪のなかへ



週間の実習を終えた学生が、子どもたちと抱き合って泣きながら別れを惜しむ。そんな光景が繰り返られるのが離島実習。ここでは、学校だけでなく地域の輪のなかに入り、人々といっしょに活動する貴重な体験ができます。長崎大学では教員養成課程の中心に独自のプログラムとして『蓄積型体験学習』があり、これはその一つ。附属教育実践総合センターの小原達朗教授にお聞きしました。

割などを、理屈ではなく体全体で学べるのが離島実習のいいところです。長崎県で教員になると離島勤務は必ず体験します。その意味でも複式学級の運営の仕方などこ



教育実習の一コマ。給食の時間は子どもといっしょに食べます。「楽しくたくさん食べられる雰囲気づくりは大切です。いってみれば食事の量は元気で積極的なクラスのバロメーターなのです」と山路先生。

です。県外から

学生は、島の小学校などはなかなか体験できないとあって積極的に参加しますよ。今年からは陸続きのへき地の小学校へ行くメニューも加わりました。そのほかボランティア実習や地元企業での体験学習など多彩な実習が体験できるんですね。「いずれも、学生が自分たちで手配するのです。実習先を決めることから始まり、電話して説明をしてアポイントを取る。企業の場合は企画運営から入ります。主体的に関わるので社会常識も身に付きますよ。」なるほど、それは大事なポイントですね。実習委員長の佐藤敬助教授にもお聞きしました。「附属学校の場合、言ってみれば内輪ですから、実習とはいえ学生側には実際の現場というより授業の一つといった感があり

ます。子どもたちは実習生に何度も接しているので、上手にできなくても優しく見守ってくれます。ところが一般の学校での学習支援などではそうはいきません。相手が実習生だろうが先生だろうが関係ないし、反抗したり、まともにぶつかってくる子もいます。ただ、いきなりそういう現場経験をさせるわけではありません。一年では参加観察実習とあって、授業の様子を身近に感じながら観察するところからスタートするので、じわじわと慣れていくわけです。」カリキュラム全体に力を入れる実習時間の比率は他の大学に比べて大きく、現場で鍛えあげていくのが長大教育学部のいいところ。「長大出身の教員はタフだ」と、学校での評価も高いのです。



離島実習では少人数の子どもとしっかり向きあいました。「地域でも学校でもみんな名前を知っているので名札を付けた子どもがいらない。私たちが名札のない先生になってすぐ溶け込めました」という感想を書いた学生も。島全体で子どもを育てていることを実感しました。

一年間の 継続的な交流 親子広場 「この指とまれ」

大 学が地域に貢献できることは何か。そんな問いからスタートした企画が「この指とまれ」。二歳から三歳の子どものお母さんの親子十四組が、週一回、教育学部内にあるプレイルームに集まり交流します。企画運営は子ども保育専攻の学生たち。担当の井口均教授は語ります。

「以前、長崎で幼児が犠牲になった痛ましい事件がありました。その加害者である子どもが幼児期から暴力的で、お母さんも相談もできずに孤立していたという話を聞き、大学としてやれることがあるのではないかと考えたのがきっかけです。試行錯誤を経て、今では長崎市の広報誌で募集した親子と一年間交流していく形になりました。このプログラムの年間行事はお誕生会や芋の苗植えから芋ほりなど。お母さんたちも交流して、時には私が加わって悩み相談などの時間を持ちます。」

学生は早い時期に自分と相性のいい子どもを見つける、つまりペアを組んで一年を通して一緒に遊びます。難しいといわれるこの時期の子どもの成長を年間通して観察できます。なんとこのプログラムは授業の一環でもあるのです。

「午前中に交流をし、午後は記録と分析の反省会。最初は子どもからお母さんたちを離し、お母さん同士で話せる環境を大切にします。一年たつと子どもも親も変わってきますよ。」悩める親子は明るくなり、学生も勉強になる。まさに双方にメリットのある好例ですね。



キャンパスや公園へ遊びに行くこともあります。

3Dを使った 新しい形の 平和学習モデル

デジタル画面には被爆直後の3Dメガネをかけて観る子どもたち。3Dのコンピュータグラフィックス(CG)で構築したもので、3Dメガネをかけるのと、あたかもその場所に立っているかのよう。スマートフォンにも連動しており、先に実際に街歩きを体験し、歩いたコースが画面に表示されるという仕掛けです。このバーチャルリアリティシステムは、藤木卓教授が中心となって開発。現在、国立原爆死没者追悼平和祈念館の交流ラウンジで修学旅行生や地元の子どもたちだけでなく、一般の方も体験できます(要事前予約)。「私自身も長崎出身ですが、被



3Dメガネをかけて観る子どもたち。

爆体験継承をはじめ、平和教育は曲がり角に来ているように思います。復興した街を歩いただけではピンとこないという話もあり、現在と過去をつなぐ視点で振り返りの学習ができなかと考えました。昨年二月にお披露目したのですが、祈念館の館長さんにも高い評価をいただきました。疑似体験まではいきませんが、街が無くなってしまった喪失感や多くの人々の平和希求への願いを今の子どもたちに感じてもらえれば嬉しいです。」CGの制作過程では、学生たちが数多くの被爆写真資料を見比べる作業を重ね、フィールド調査も行いました。今年は料金を得て、さらにクオリティをあげるためにCG制作をプロに発注、四年後のシステム更新と総合的な平和学習の実現をめざしています。